

(Reconsideration) The Case of “Noun Phrases + *Kakari* Particles” —During the Heian Periods—

Yamada Masahiro

This paper will clarify the syntactic behavior of “noun phrases + *ka-kari* particles” in the Heian period in context of the results obtained by Yamada (2015) and the research which followed. This study then examines what kind of system is used to operate “noun phrases + *kakari* particles” which are not case-marked.

【The operation as *GA* case】

Most animate noun phrases are in the *GA* case, with Inanimate noun phrases also observed in the *GA* case; however, because of their non-actioner nature, they are used as *GA* cases of non-actioners in unintentional intransitive verbs and adjectival sentences.

【The operation as *WO* case】

Generally, when using animate noun phrases as objects in transitive verb sentences, they must be marked with *WO*. Animate noun phrases function in the *GA* case, and if the animate noun phrase does not indicate that it is an object, it will interfere with the conveyance of information. However, when there are other actors as co-occurring components, or in certain transitive sentences, they can operate as objects without *WO* marking. In transitive sentences, inanimate noun phrases are, in principle, operated as objects, but can also operate as *GA* case actors if there is a syntactic operation to indicate the existence of other *WO* case objects as co-occurring components. However, its use as a case study for the *GA* is rare.

(再考) 古典語に見られる 〈名詞句＋係助詞〉の格 ——平安期の実態——

国際日本学部日本文化学科 山田昌裕

1. はじめに

日本語の数量的研究において、いまや国立国語研究所の「中納言」(コーパス検索アプリケーション)は欠かすことのできないものである。山田(2015)では平安期に見られる〈名詞句＋係助詞〉の格の実態が示されているが、検索方法に不備があり、改めて『日本語歴史コーパス』を用いて調査しなおすと修正すべき点が散見される¹⁾。またその後の山田(2021)などの研究成果を取り込むことによって、平安期の〈名詞句＋係助詞〉の格の実態をさらに鮮明にあぶり出すことができる。

そこで、本稿では、山田(2015)の研究成果やその後の研究の成果を取り込みつつ、改めて平安期における〈名詞句＋係助詞〉がどのような統語的振る舞いをしているのか、その実態を明らかにした上で、格表示されない〈名詞句＋係助詞〉がどのようなシステムで運用されているのか、について考察する。以下、2章では、名詞句の分類と分析対象について、3章では山田(2021)に基づいて、I型名詞句(無助詞名詞句)の統語的振る舞いについて確認し、4章では、平安期に見られる〈名詞句＋係助詞〉の統語的振る舞いと運用法について考察する。5章では、〈名詞句＋係助詞〉が運用においてガ格に偏る理由について、6章では、格が想定できない

〈名詞句＋係助詞〉について付言する。7章では、今後の課題について述べる。

2. 名詞句の分類と分析対象

統語上の格を担う名詞句は、助詞の有無、格表示の有無などによって3種に分類できる（【図1】参照）。

【図1】

	分類	助詞	格表示
無助詞名詞句	I型	無	無
有助詞名詞句	II型	有	無
	III型	有	有

ひとつは助詞が全く下接しない無助詞名詞句（これをI型とする）と、助詞が下接する有助詞名詞句のうち、格表示を受けない格非表示名詞句（これをII型とする）と格表示を受ける格表示名詞句（これをIII型とする）、以上の三種である。

(1) (2) はI型、(3) (4) はII型、(5) (6) はIII型の例である。以下、本稿では、「 ϕ 」は助詞がないことを示し、括弧内のカタカナは統語的に想定される、名詞句の格を示す。

- (1) 聞こえわづらひて、あこぎ ϕ (ガ) 返事 ϕ (ヲ) 書く

(落窪物語 48)

- (2) まづ、母のありさま ϕ (ガ・ヲ) いと問はまほしく

(源氏物語・夢浮橋 388)

- (3) 「我こそ (ガ) 死なぬ」とて、泣きののしること、いと堪へがたげ

なり (竹取物語 66)

(4) 来けるあひだに、車よりかかることぞ (ヲ) いひたる
(平中物語 494)

(5) 「しかじかなむ、あこぎが言ひし」と申すに (落窪物語 135)

(6) おなじ女のもとに、さらに音もせで、雉をなむおこせたまへりけ
る (大和物語 307)

本稿で考察対象とする名詞句は、係助詞「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」が下接する名詞句（以下、本稿では「コソ」名詞句、「ゾ」名詞句のように呼ぶこととする）であるが、これらをまとめてⅡ型とする²⁾。格表示を受けないという点で、Ⅱ型はⅠ型と同様の統語的振る舞いをすると思われるが、はたして実態はどうか。

統語的振る舞いに焦点を当てるため、格を担わない成分は本稿では考察対象としない。具体的には、活用語連用形 (7)、従属節 (8)、副詞 (9)、数量詞 (10)、時の名詞 (副詞的名詞) (11)、格が想定できない名詞句 (12)³⁾ などである。

(7) 「そのことの心は苦しうこそはあれ」と、わびいりて答ふるに
(蜻蛉日記 336)

(8) 尼になりて山に入りてぞありける (伊勢物語 162)

(9) 使、「ししかかなむいひつる」とて語れば (平中物語 524)

(10) 車十余なむありける (落窪物語 337)

(11) 内大臣の位にて、二十五年ぞおはしましける (大鏡 333)

(12) 「かかる事なむある。さる事やけしき見たまひし。しのびてあり
さまのたまへ」 (枕草子 393)

3. I 型の統語的振る舞い

II 型がどのような統語的振る舞いをしているのかについて I 型と比較しながら考察するために、まずは I 型の様相を確認する。山田（2021）では、平安期の I 型がどのような格成分として出現しているか、その分布を示している（【表 1】 参照）。

【表 1】 I 型において想定される格の分布

ガ	15866	66.83%
ヲ	6888	29.01%
ガヲ	542	2.28%
ニ	207	0.87%
ガニ	94	0.40%
ニヲ	87	0.37%
デ	22	0.09%
ニヲヨリ	19	0.08%
ヲヨリ	8	0.03%
ヨリ	5	0.02%
ト	3	0.01%
合計	23741	100.00%

I 型はガ格 66.83%、ヲ格 29.01%、計 95.84% であり、ガヲ格 2.28% を合わせると、98.12% がガ格またはヲ格である。I 型はほとんどがガ格またはヲ格として運用されていることがわかる。

また山田（2021）では、名詞句の有生性無生性によって統語的振る舞いが異なることを数値で示し（【表 2】 参照）、「有生名詞は明らかにガ格に偏る。そのことと表裏の関係になるのであろうが、ヲ格にはなりにくとも言える。一方、無生名詞はガ格が優勢ではあるものの、ヲ格も少なから

【表 2】 有生性無生性から見たⅠ型の格の分布

	有生名詞句		無生名詞句	
ガ	6355	89.84%	9511	58.63%
ヲ	707	9.99%	6181	38.10%
ガヲ	12	0.17%	530	3.27%
合計	7074	100.00%	16222	100.00%

ず存在する」と述べる。

4. Ⅱ型の統語的振る舞い

ここでは、Ⅱ型の統語的振る舞いを数値で確認した上で、Ⅱ型の運用法について考察する。

4.1 Ⅱ型の格分布

まずⅡ型の全体像を捉えたい。Ⅱ型は格標示を受けないため、Ⅰ型と同様の統語的振る舞いをするものと予想されるが、実態はどうであろうか。

【表 3】はⅡ型において想定される格の分布を示した表である。

「コソ」名詞句 553 例中 538 例 (97.3%) がガ格またはヲ格となっており、同様に、「ゾ」名詞句 409 例中 404 例 (98.9%)、「ナム」名詞句 353 例中 352 例 (99.1%)、「ヤ」名詞句 305 例中 300 例 (98.4%)、「カ」名詞句 186 例中 179 例 (96.3%) がガ格またはヲ格となっている。Ⅰ型のほとんどがガ格ヲ格であったように、Ⅱ型もほとんどがガ格ヲ格となっており、ガ格ヲ格に偏るという点では、Ⅰ型とⅡ型は同じ様相を呈していると言ってよい。

(13) ～ (17) のようなガ格ヲ格以外の格として機能していると思われる名詞句は僅少である。裏を返して言えば、ガ格ヲ格以外の格成分として

【表 3】Ⅱ型において想定される格の分布

	コソ		ゾ		ナム		ヤ		カ	
ガ	491	89.0%	373	91.2%	319	90.4%	260	85.2%	155	83.8%
ヲ	26	4.5%	16	3.9%	22	6.2%	38	12.5%	21	11.3%
ガヲ	21	3.8%	15	3.7%	9	2.5%	2	0.7%	2	1.1%
ガニ	6	1.1%	2	0.5%	1	0.3%	3	1.0%	0	0.0%
ニ	4	0.7%	1	0.2%	1	0.3%	2	0.7%	7	3.8%
デ	5	0.9%	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ヨリ	0	0.0%	0	0.0%	1	0.3%	0	0.0%	0	0.0%
合計	553	100.0%	409	100.0%	353	100.0%	305	100.0%	185	100.0%

Ⅱ型を運用する際には、格助詞が付与される（Ⅲ型で運用する）ということになる。

- (13) 母屋の中柱に側める人や（ニ）わが心かくるとまづ目とどめたまへば
（源氏物語・空蟬 120）
- (14) 知れる人、逍遙せむとて、呼びければ、そちぞ（ニ）この男はいにける
（平中物語 496）
- (15) 「なほかう思し知らぬ御ありさまこそ（デ）、かへりては浅う御心のほど知らるれ」
（源氏物語・夕霧 408）
- (16) 向かひゐてけしきあしうまもりかはすと、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ（デ）、心のほどは見えはべるかし
（紫式部日記 208）
- (17) らうたげなりし人を、行く方知らずなりにたること、すべて女子といはむものなん（ヨリ）、いかにもいかにも目放つまじかりける
（源氏物語・蛭 219）

4.2 有生性無生性から見たⅡ型の格分布

Ⅰ型においては有生性無生性によってガ格ヲ格の分布が異なっていた(【表2】参照)。Ⅱ型の実態はどうであろうか。【表2】にならって有生性無生性の観点からⅡ型の実態を明らかにしたい。【表4】はⅡ型の有生性無生性から見たガ格ヲ格の分布を示したものである。表中の「 ϕ 」はⅠ型に対応し、「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」はⅡ型に対応する。

【表4】からは次のことが見て取れる。

【表4】 有生性無生性から見たⅠ・Ⅱ型の格分布

			ガ格		ヲ格		ガヲ格		合計	
有生名詞句	Ⅰ型	ϕ	6355	89.8%	707	10.0%	12	0.2%	7074	100%
	Ⅱ型	コソ	165	97.6%	1	0.6%	3	1.8%	169	100%
		ゾ	149	97.4%	1	0.6%	3	2.0%	153	100%
		ナム	128	97.7%	2	1.5%	1	0.8%	131	100%
		ヤ	82	96.5%	3	3.5%	0	0.0%	85	100%
		カ	74	98.7%	1	1.3%	0	0.0%	75	100%
無生名詞句	Ⅰ型	ϕ	9511	58.6%	6181	38.1%	530	3.3%	16222	100%
	Ⅱ型	コソ	327	88.6%	24	6.5%	18	4.9%	369	100%
		ゾ	224	89.2%	15	6.0%	12	4.8%	251	100%
		ナム	190	87.2%	20	9.2%	8	3.7%	218	100%
		ヤ	178	82.8%	35	16.3%	2	0.9%	215	100%
		カ	81	78.6%	20	19.4%	2	2.0%	103	100%

- a Ⅰ型の有生名詞句は約90%がガ格であるが、Ⅱ型の有生名詞句はさらにガ格への偏りが強くなり、ほとんどがガ格として機能している。ガ格への偏りが強くなるのは、Ⅱ型の無生名詞句においても同様である(表中の太枠を参照)。


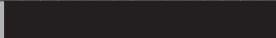




Ⅰ型の場合は、助詞が何も付いていない名詞句単体であるため、統語的

振る舞いの差異を生じさせる要因として、名詞句自体の性質、すなわち有生性無生性に求めるほかはない。一方、Ⅱ型においてガ格への偏りが顕著になるのは、名詞句の有生性無生性に加えて、係助詞の性質が関わっているものと考えられる。

4.3 Ⅱ型の統語的振る舞いと意味役割

ここではⅡ型の統語的振る舞いと意味役割という観点から全体像を捉えてみたい。山田（2021）ではⅠ型の統語的振る舞いと意味役割に関して【図2】のようにまとめている。図中の「ガ格行為者」は他動詞文や意志自動詞文（「とぶらふ」「まゐる」「いづ」など）の主語のことであり⁴⁾、「ガ格非行為者」は非意志自動詞文（「あり」「まじる」「みゆ」など）や形容詞文、名詞文の主語のことである。

【図2】 Ⅰ型名詞句の統語的振る舞いと意味役割

	ガ格行為者	ガ格非行為者	ヲ格対象
無生名詞			
有生名詞			

山田（2021）は、無生名詞句は意志性を持たないため、ガ格行為者としての役割を持たない（非行為者性）と指摘する。一方、有生名詞句は意志性を持つため、ガ格行為者として認識されやすく、ヲ格対象としては使いにくい（非対象性）と指摘する。ヲ格対象としての出現率は低く（約10%、【表2】参照）、ヲ格対象という役割を付与する際には、ヲ標示をとまうことが多い（ヲ格有生名詞句におけるヲ標示率65%、【表5】参照）。また無生名詞句、有生名詞句の統語的振る舞いが重なるガ格非行為者に関しては、非意志自動詞文や形容詞文などにはヲ格対象が存在しないので、Ⅰ型のままでも情報伝達上の支障はなかったと述べている。【図3】は、

【表 4】のデータを踏まえ【図 2】にならって作成した図である。

【図 3】 II 型名詞句の統語的振る舞いと意味役割

	ガ格行為者	ガ格非行為者	ヲ格対象
無生名詞句			
有生名詞句			

【図 3】では無生名詞句のガ格行為者の部分とヲ格対象の部分に空白が多く見られる。ここに該当する例が少ないということである。言い換えれば、この部分での II 型の運用は避けられていたということになる。なぜこのような空白部が生じるのであろうか。

4.4 無生名詞句ガ格行為者

ここに該当する例は他動詞文 97 例中 3 例 (3.1%) しか見られない⁵⁾。無生名詞句は基本的に意志を持たないため行為者として認識されない。したがって他動詞文においてはガ格行為者にならず、原則としてヲ格対象として機能する。このことからすると、他動詞文中の II 型無生名詞句がガ格行為者となっている例が僅少であることは首肯される。

3 例について詳しく見てみよう。

(18) 若菜ぞ (ガ) 今日をば知らせたる (土佐日記 22)

(19) もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でゐてながめば、いとど、月や (ガ) いにしへゆ (ヲ) ほめてけむと、見えたる有様をもよほすやうにはべるべし (紫式部日記 203)

(20) さりとともと、世を思し召されけるなるべし。月のあかき夜、
海ならずたたへる水のそこまでにきよき心は月ぞ照らさむ
これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそ (ガ) は照ら

(18) (19) は、波線部「今日」「いにしへ」という対象が明示されているので、無生名詞句である「若菜」「月」がガ格行為者として機能していることが理解される。(20) は、同文中に「照らす」の対象は存在しないが、歌中に「きよき心は月ぞ照らさむ」とあることから、波線部「きよき心」が対象であることは明確であり、「月日」がガ格行為者であることが理解される。

このように (18) ～ (20) においては、いずれもヲ格対象となるものが存在するため、原則ヲ格対象となる無生名詞句がいわばガ格行為者に格上げされている。他動詞文における無生名詞句はヲ格対象として運用するのが原則であるが、他の格成分と共起させることによってガ格行為者としても運用することもできたということになる。

4.5 ヲ格対象

Ⅱ型はⅠ型に比べるとヲ格対象の部分の空白が多くなる。つまり運用例が少ない。【表 4】によれば、有生無生に関わらずⅡ型はガ格に偏ることがわかるが、Ⅰ型との違いは係助詞が下接しているかどうかであり、係助詞の性質によってガ格への傾きを強めていると考えることができる（なぜガ格に偏るのかについては5章で述べる）。【図 2】で示したⅠ型の有生性無生性による統語的振る舞いのうえに、係助詞の性質が被さっているということになる。

とはいえ、Ⅱ型がヲ格対象として運用されていることもまた事実である。無生名詞句には非行為者性があるため、Ⅱ型無生名詞句がヲ格対象になることは首肯されるが、Ⅱ型有生名詞句のほとんどがガ格となっている中で、どのようにしてⅡ型有生名詞句をヲ格対象として運用していたのか気にな

るところである。

4.5.1 他動詞文におけるヲ標示の実態と有生名詞句の運用

ここでは、Ⅱ型ヲ格名詞句に焦点をあてて、ヲ標示の実態と有生名詞句の運用法について考察する。【表5】はヲ格名詞句におけるヲ標示の有無を示した表である。

【表5】 ヲ格名詞句におけるヲ標示の有無

		ヲ標示		ヲ非標示		合計	
ヲ格有生名詞句	φ	1336	65%	707	35%	2043	100%
	コソ	31	97%	1	3%	32	100%
	ゾ	38	97%	1	3%	39	100%
	ナム	26	93%	2	7%	28	100%
	カ	7	87%	1	13%	8	100%
	ヤ	3	50%	3	50%	6	100%
ヲ格無生名詞句	φ	6899	53%	6181	47%	13080	100%
	コソ	69	74%	24	26%	93	100%
	ゾ	100	87%	15	13%	115	100%
	ナム	121	86%	20	14%	141	100%
	カ	41	67%	20	33%	61	100%
	ヤ	32	48%	35	52%	67	100%

【表5】からは以下のことが言えるであろう。

- b 「コソ」「ゾ」「ナム」「カ」が下接するヲ格有生名詞句は、原則ヲ標示を受けⅢ型となっている（Ⅲ型で運用する）。ヲ格無生名詞句の場合はややヲ標示率が下がるが、Ⅰ型に比べるとヲ標示率が高く、やはりⅢ型になる傾向がうかがえる（表中の太枠部参照）。

- c 「ヤ」名詞句に関しては、ヲ格有生名詞句の用例数が少ないため正確なことは言えないが、「ヤ」名詞句全体としてヲ標示率はⅠ型より低く、Ⅱ型とⅢ型の割合が同程度となっている（表中の色塗り部参照）。

係助詞が下接するヲ格有生名詞句が、他動詞文においてⅢ型になっている例を以下に示しておく（(21)～(25)）。

- (21) 大殿、「あやしや。物の師をこそまづはものめかしたまはめ。愁はしきことなり」とのたまふに（源氏物語・若菜下 202）
- (22) 「さばかりにては、さな言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを（源氏物語・葵 23）
- (23) 「身の心細さに、人の捨てたる子をなむ取りたる」などものしおきたれば（蜻蛉日記 285）
- (24) 「何のさる人をか、この院の中に棄てはべらむ」（源氏物語・手習 283）
- (25) 「なほ、ただに思はむ人かくはせじ。おとどをや、〈あし〉と思うたまふらむ。いかなることに当りたまふらむ」と集まりて嘆く中に（落窪物語 176）

「コソ」「ゾ」「ナム」「カ」が下接するヲ格有生名詞句は原則としてⅢ型になるという実態が明らかとなった。なぜヲ標示を必要とするのであろうか。

4.5.2 ヲ格有生名詞句の運用法

Ⅱ型有生名詞句は、係助詞の性質によって特にガ格に偏っていた（【表4参照】）。有生名詞句は意志性を持つため、他動詞文においては行為者、

つまりガ格として認識されやすい。そこに名詞句をガ格に偏らせる性質を持つ係助詞が下接すると、一層ガ格としての認識が先に立つことになる。そのような環境下で、他動詞文において有生名詞句を対象として運用するためには、Ⅲ型にして対象であることを明示する必要がある。ヲ標示がなければガ格としての認識が先に立ってしまい、情報伝達上の支障となるからである。「コソ」「ゾ」「ナム」「カ」が下接する有生名詞句においてヲ標示率が高くなることは首肯される。

しかし、僅少ではあるが、Ⅱ型のままの有生名詞句が他動詞文において対象として機能している例があることも事実である（(26)～(31)、(38)(39)が全例）。Ⅱ型有生名詞句をⅢ型にすることなくヲ格対象として運用する際には、どのような条件や特徴が見られるのであろうか。以下3つに分類して説明する。

① ガ格行為者の存在

他動詞文中においてガ格行為者の存在が明らかであるため、Ⅱ型有生名詞句がⅢ型にならない場合がある。

(26) 「その姉君は朝臣の弟妹や（ヲ）もたる」（源氏物語・帚木 105）

(27) 「帝の御かしづきむすめを得たまへる君は、いかばかりの人か
（ヲ）まめやかには思さん」（源氏物語・東屋 36）

(26) (27) は、他動詞の格成分となる有生名詞句がふたつ存在する例である。それぞれ波線部「その姉君」「むすめを得たまへる君」という行為者が明示されているので、「弟妹」「いかばかりの人」が対象として機能していることは理解される。情報伝達上の支障にはならないため、ヲ標示をしていないと考えられる例である。

② 有生名詞句でも対象となりやすい他動詞

ある種の他動詞文においては、有生名詞句がヲ格対象として機能しやすい場合がある。

- (28) 「常陸殿といふ人や（ヲ）、ここに通はしたまふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出でつる車副などこそ、ことさらめきて見えつれ」

（源氏物語・東屋 58）

- (29) 尾張へは、殿の上ぞ（ヲ）つかはしける （紫式部日記 177）

- (30) 少将、これを見るにも、左の大臣もいみじう思ふ。播磨守は、国にて、え知らざりければ、人なむ（ヲ）やりける（落窪物語 327）

- (31) かかる人なん（ヲ）率て来たるなど、法師のあたりにはよからぬことなれば （源氏物語・手習 291）

(28) ～ (31) は、他動詞の格成分となる有生名詞句がひとつ存在する例である（(30) の「やりける」のガ格行為者は「播磨守」ではなく「少将」）。先にも見てきたように、有生名詞句は特に条件がなければガ格行為者として機能する。しかし他動詞「通わす」「つかはす」「やる」「率て来」においては有生名詞句をヲ格対象として使用する人が多いようである。これらの動詞の特徴について考察するために I 型の例を見てみたい。(32) ～ (35) は I 型有生名詞句がひとつだけ文中に出現する例である。

- (32) かたじけなうおほゆるさまなれば、人（ヲ）通はしたまふ塗籠の北の口より入れたてまつりてけり （源氏物語・夕霧 478）

- (33) 「ここにはしばしは住まじ。二条殿に住まむ。行きて格子あけさせよ。きよめせよ」とて、帯刀（ヲ）つかはしつ

（落窪物語 135）

- (34) 中納言殿には、物をだに運びかへしに人φ (ヲ) やりたまへど
(落窪物語 228)

- (35) 「つかの穴ごとに、燕は巢をくひはべる。それに、まめならむ男
どもφ (ヲ) 率てまかりて、足座を結びあげて、うかがはせむに、
そこの燕子うまざらむやは」
(竹取物語 51)

(32) ～ (35) のように、「通わす」「つかはす」「やる」「率て来」などの文における I 型有生名詞句は、ひとつだけ出現していてもすべて対象として使われている。これらの他動詞における有生名詞句は、ヲ標示を受けなくてもヲ格対象として運用されるのが原則のようである⁶⁾。

ただし、(36) (37) のように、有生名詞句がひとつだけ存在するとしても、対象となる無生名詞句が存在する場合には、ガ格行為者として機能している。

- (36) その君、内よりまかでたまひけるままに、風になむあひたまうて
わづらひたまひける。とぶらひに薬の酒・肴など調じて、兵衛の
命婦なむ (ガ) やりたまひける
(大和物語 413)

- (37) 「この、奉る文を見たまふものならば、たまはずとも、ただ『見
つ』とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」
とぞいひやりける。男φ (ガ) やる。

夏の日に燃ゆるわが身のわびしさにみつにひとりの音をのみ
ぞなく
(平中物語 457)

(36) は、波線部の「薬の酒・肴など」という対象が明示され、「兵衛の命婦」がガ格行為者となっている。(37) は、「見つ」とばかりはのたまへ」と男が送った手紙の返事として、女が「見つ」とだけ言ってよこして

きたことに対して、さらに男が歌を送った、という文脈で、波線部の歌が「やる」の対象となっており、やはり男がガ格行為者となっている。

このように対象が存在することによって有生名詞句がガ格行為者として機能する場合もあるが、「通わす」「つかはす」「やる」「率て来」において有生名詞句がひとつだけ出現する場合には、ヲ格対象として機能するのがデフォルトであると考えてよさそうである。

③ 文脈による解釈

①②にも該当しない例が以下の(38)(39)である。有生名詞句がヲ格名詞句として機能しているということが理解されるのは、文脈によるしかな言いようがない。

(38) 涼、仲忠などが事、御前にもおとりまさりたるほどなど仰せられる。「まづこれはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしさをせちに仰せらるるぞ」など言へば、「何か。琴なども天人のおるばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御むすめや(ヲ)は得たる」と言へば、仲忠が方人ども所を得て「さればよ」など言ふに
(枕草子 144)

(39) 今の人の親などは、おし立ちて言ふやう、「妻などもなき人の、せちに言ひしに婚すべきものを。かく本意にもあらで、おはしそめてしを、くちをしけれど、いふかひなければ、かくてあらせてまつるを、世の人々は、『妻すゑたまへる人を。思ふと、さ言ふとも、家にすゑたる人こそ(ヲ)、やごとなく思ふにあらめ』など言ふも安からず。げにさることに侍る」など言ひければ

(堤中納言物語 488)

(38) は、『宇津保物語』の主要人物である「涼」と「仲忠」の優劣について議論するという文脈で、中宮が「仲忠」の劣っている点として、その生い立ちを指摘したことに対して、清少納言が、「涼」は「いとわるき人」であり、「仲忠」のように「帝のむすめ」を手に入れることはできなかったのではないかと述べ、「仲忠」の方が優っていると反論する場面である。(39) は、「本意にもあらで」娘を結婚させた親が、他にも妻を持つその男に対して不満を述べる場面である。娘の親は、世間の人が「男が娘のことを思うと言っても、家に住まわせている人（今の妻）の方を大切に思うのであろう」と言うのも心穏やかではない、と不満を述べている。このように文脈によって有生名詞句が対象として機能していると判断せざるを得ない例は、他動詞文中のⅡ型有生名詞句 192 例中 2 例 (1.0%) となっており僅少である。

以上、Ⅱ型有生名詞句をヲ格対象として運用する際の特徴について、3 つに分類して示した。これらのことを踏まえて、どのようにⅡ型有生名詞句を対象として運用していたか、についてまとめると以下ようになる。

- d Ⅱ型有生名詞句は原則としてⅢ型（ヲ標示）で運用する。
- e ただし他の格成分の存在によって対象であることが理解される場合、また、ある種の他動詞文中ではⅡ型のままでも運用できる⁷⁾。

4.6 Ⅱ型名詞句の運用

以上、4 章ではⅡ型の統語的振る舞いの実態とその運用について考察した。以下にⅡ型の運用法についてまとめる。

〈ガ格としての運用法〉

Ⅱ型はガ格として運用することが多く、特に有生名詞句はほとんどがガ

格であった（aより）。無生名詞句もガ格での運用が多く見られるが、非行為者性があるため、非意志自動詞や形容詞文におけるガ格非行為者としての運用となる（【図3参照】）。

〈ヲ格としての運用法〉

Ⅱ型有生名詞句をヲ格対象として使用する際には、原則としてⅢ型（ヲ標示）で運用しなければならない（b、dより）。Ⅱ型有生名詞句はガ格として機能するため、当該の有生名詞句がヲ格対象であることを明示しないと情報伝達上の支障が生じるためである。ただし、共起成分として他にガ格行為者が存在する場合や、ある種の他動詞文においては、Ⅱ型のままの有生名詞句でもヲ格対象として運用できる（eより）。

Ⅱ型無生名詞句は他動詞文においては原則としてヲ格対象として運用するが、共起成分として他にヲ格対象の存在を示すという統語上の操作があれば、ガ格行為者として運用することもできる。ただし、ガ格行為者としての運用は僅少である。

5 ガ格への偏りの理由

なぜⅡ型はⅠ型よりもガ格としての運用に傾くのであろうか。ここでは、名詞句に係助詞が下接するとガ格に偏る理由について考察する。

係助詞は格成分以外に、活用語連用形、従属節、副詞、数量詞（(7)～(10)参照）などに下接し、述語内部などにも用いられ、それらに焦点を置くとされる。野村（2001）では、「係りの意義」について情報論的に次のように捉えている。

連体形結びの係りの意義を考察するためには、提起されてきた用語の

中では「焦点」が適当である。「焦点」は、文の選択的指定点であれば結構であるが、それは恐らく規定として強力すぎる。曖昧化してしまうけれど、「選択的指定点ないし文情報の重要点」の如くに弱い規定を与えねば実際的ではなくなってしまう。

Ⅱ型はⅠ型に係助詞が下接しているわけであるから、係助詞が単純に文中の格成分に焦点を当てているとすると、Ⅱ型で想定される格分布はⅠ型のそれに近くなるはずである。しかし、その実態はガ格への偏りが顕著であるということは、係助詞の焦点の当て方とガ格には親和性があるということになろう。尾上（2004）は「名詞項と述語との意味関係を大きく変えないで格助詞で言うとするればガが用いられる項」をガ格項と定義し、「多様なガ格項の共通性とは、一言で言えば、事態認識の中核項目ということであろう」と述べる。ガ格が「事態認識の中核項目」であるとするなら、「選択的指定点ないし文情報の重要点」となりやすいと考えられる。Ⅱ型がガ格に偏るのは、こうした背景があるのではないだろうか。

6 格が想定できない名詞句

山田（2021）では平安期の日本語に関して、「主語表示専用の助詞は存在せず（従属節においては「ガ」「ノ」を援用するが）、「ヲ」の標示も任意であり、文の基幹となる格構造は、格標示によってがっちり固めるスタイルではなく、いわば「緩い構造」である」と述べている。Ⅱ型においても、この「緩い構造」を示す例は散見される。以下にその一部を示す。

- (40) 髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見え

たり。むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。
心地ぞなほ静かなる気を添へばやとふと見ゆる

(源氏物語・空蟬 120)

- (41) 「あなわびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」と言ひたる、いみじう心づきなし。かの言ふ者は、ともかくもおぼえず、このゐたる人こそ、をかしと見え聞えつる事も失するやうにおぼゆれ

(枕草子 125)

- (42) 「大事として、まことにうるはしき人の調度の、飾りとする定まれるやうある物を難なくし出づることなむ、なほまことの物の上手はさまことに見え分かれはべる」

(源氏物語・帚木 69)

- (43) 右京の君のもとに、「かかる事なむある。さる事やけしき見たまひし。しのびてありさまのたまへ。さる事見えずは、かう申したりと、な散らしたまひそ」と言ひやりたるに

(枕草子 393)

(40) は、源氏が空蟬と軒端萩を垣間見て、女を「をかしく」見はするものの、もう少し「静かなる気」があるといいと思う場面である。文脈上の意味としては、「心地」は「心の中では」「気持ちの中では」となるであろうか。(41) は、長居する主人に対して、その供の者が「もう夜中になってしまう」と不満を漏らすのを聞いて、作者が思いを述べる場面である。作者は、不満を言う者に対しては「ともかくもおぼえ」ないが、「このゐたる人」に対しては、「をかしと見え聞えつる」思いも消えてしまうように思われると言う。文脈上の意味としては、「(ゐたる人) に対しては」「(ゐたる人) に関しては」となるであろうか。(42) は、「(し出づること) によって」「(し出づること) において」、(43) は、「(さる事) に関して」「(さる事) について」となるだろうか。

(40) ～ (43) のⅡ型にはいずれも格が想定できない。「～に対して」

「～に関して」「～によって」「～において」「～について」など、いわゆる現代語の複合助辞であれば対応できるものである。これらのⅡ型は述語成分との意味的関連性を持つてはいるが、述語成分の格項目としては認めることはできない。このような格が想定できない成分を文の構成要素として参与させることができるのは、平安期日本語の「緩い構造」によるものであると考えられる。ガ格ヲ格の両格が想定される名詞句が一定数見られることもこの「緩い構造」に通底する現象であると思われる（(44)～(46)）。

(44) 勅使こそ（ガ・ヲ）たれともたしかにも聞きはべらね。禄など、
にはかにて、いかにせられけむ」と言へば（大鏡 138）

(45) 外国にありけむ香の煙ぞ（ガ・ヲ）、いと得まほしく思さる
（源氏物語・総角 312）

(46) 「歌などよむは世の常なり。かくをりにあひたる事なむ（ガ・ヲ）
言ひがたき」とぞ仰せられける（枕草子 305）

7 今後の課題

本稿ではⅡ型名詞句の使用実態を踏まえたうえで、4. 6において、その運用法についてまとめた。またその実態と運用法に関連する事象についても付言した。今後は平安期におけるⅡ型の使用実態と運用法を踏まえて、鎌倉期におけるⅡ型の使用実態と運用法について考察したい。

注

- 1) 本稿では、用例の検索にあたっては、国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス 平安時代 編Ⅰ 仮名文学』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>を用いた。いわゆる係り

結びとなる係助詞を分析対象とし、「ハ」「モ」は除いた。また『古今和歌集』と韻文もデータから除いた。キーはそれぞれ「名詞」「代名詞」「接尾辞-名詞的-一般」とし、後方共起は語彙素読み「コソ」「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」で短単位の追加として「助詞」を指定した。引用は、『新編 日本古典文学全集』（小学館）の作品名と頁数を示した。

- 2) II型名詞句には副助詞が下接する名詞句も含まれることになるが、これに関しては山田（2023）で述べた。
- 3) II型名詞句の格分布には数量的に影響はないため、ここでは一旦除くが、格が想定できない名詞句については6章で考察する。
- 4) 述語動詞自体は意志自動詞と考えられるものでも、無生名詞句がガ格に立つことによって、その名詞句は非行為者としての役割を担うことになる。

(1) 常陸の介（ガ）出で来たり（枕草子 157）

(2) 母君も、さこそひがみたまへれど、うつし心（ガ）出でくる時は
(源氏物語・若菜上 122)

(3) 「あなうたてや。いめめかしくなり返せたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる
御すさび言どもこそ（ガ）時々出で来れ」とて、ほほ笑みたまへれど
(源氏物語・若菜上 125)

(4) すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむ（ガ）、おのづから出で来ぬべきを、
その御心づかひなむあべき
(源氏物語・胡蝶 181)

(5) わが常に責められたてまつる罪避りごとに、心苦しき人の御もの思ひや（ガ）出で来む
など、やすからず思ひるたり
(源氏物語・末摘花 282)

(1) の述語動詞は行為を表すが、(2) ～ (5) の述語動詞は出現・発生や状態変化を表す。前者はガ格が有生名詞句であることによって行為性述語となり、後者はガ格が無生名詞句であることによって非行為性述語となる。【図2】【図3】はこれを反映している。

- 5) 因みにI型無生名詞句にも他動詞主語となっている例はあるが、他動詞文中、無生名詞句がガ格行為者となっているのは13例（0.21%）、ヲ格対象となっているのは6035例（99.79%）であり、無生名詞句をガ格行為者として運用する例は皆無に等しい
- 6) 他にも、「出だす」「産む」「おこす」（「よこす」の意）「起こす」「具す」「とどむ」「まうく」「待つ」「召す」「呼ぶ」などの他動詞における有生名詞句は、「ヲ」の標示を受けなくても対象として機能しているものと思われる。このようにある種の他動詞文においては、有生名詞句がヲ格対象として使われる傾向があるようである。詳細については別稿を用意したい。
- 7) 「ヤ」名詞句に関しては、Ⅲ型での運用と①～③によるⅡ型での運用が同程度であり、他の係助詞と様相を異にするが、それがなぜなのか運用例が少ないので今のところ不明である。

【参考文献】

- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座六』朝倉書店、pp. 1-57
- 野村剛史 (2001) 「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1、pp. 1-34
- 山田昌裕 (2015) 「平安期の〈名詞句＋係助詞〉の格——その実態から見た係助詞の性質と副助詞との関連性——」近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』ひつじ書房、pp. 37-52
- 山田昌裕 (2021) 「無助詞名詞句の格と運用法—平安期鎌倉期の実態より—」『日本語文法』21-1、pp. 4-20
- 山田昌裕 (2023) 「(再考) 古典語に見られる〈名詞句＋副助詞〉の格—平安期の実態—」『青山語文』53、pp. 190-204

【付記】

本研究は JSPS 科研費 17K02791、20K00638 の助成を受けている。